

研究テーマ	対話的活動を生かして豊かな発想を生み出す工夫 －第二学年「篆刻～自分だけの印をつくろう～」の実践を通して－
-------	--

結城市立結城中学校 教諭 郡司 悟

I 研究テーマについて

中学校学習指導要領解説美術編は、第二節美術科の内容「（1）表現の内容②」に「デザインや工芸などのように、伝えることや、使うことなどの目的や条件、機能と美の調和などを考えて発想し表現の構想を練り、意図に応じて材料や用具、表現方法を工夫して表現する活動」を挙げている。本研究ではこれを受けて、伝えることや使うことなどの目的や条件に迫る手立てとして、題材の中で積極的に対話的活動を行う授業を構想した。

本題材は、実際に使用することができる道具を制作する題材であり、作品のデザインは自己表現とともに、実際に使用する場面を想定したデザインを考える必要がある。それを解決する手段として、今回の実践研究で扱う対話的活動を生かせると考えた。また、その他の題材でも適宜対話的活動や制作途中での鑑賞活動を取り入れ、生徒同士の教え合いや学び合いを活発化していきたいと考え、本テーマを設定した。

II 研究の実際

1 題材名 「篆刻～自分だけの印をつくろう～」

2 題材の目標

- 篆刻を制作することに関心を持ち、自分らしい表現を目指し、試行錯誤しつつ創意工夫している。（美術への関心・意欲・態度）
- 自分の名前をもとに発想を広げ、印の特性を考えながら工夫してデザインの構想を練ることができる。（発想や構想の能力）
- 材料の特徴をとらえ、用具を効果的に生かして、美しく創造的に表現できる。（創造的な技能）
- 自他の作品から印の特徴を生かした表現や、用途を考えたデザインの工夫を見だし、よさや美しさなどを感じ取り、味わったり肯定的に批評し合ったりできる。（鑑賞の能力）

3 題材について

(1) 生徒の実態

本校の第二学年は、第一学年時にレタリング及び文字のイメージを伝える構成の制作を通して、事物の単純化や強調について学んでおり、印影の図案を構想する段階においてそれらを生かすことができると考えられる。また、第二学年を対象に対話的活動についてのアンケートを実施した結果、「構想の段階で参考にするものは何か」という問いに対し、「参考作品」や「教師の説明」と答えた生徒が72%おり、「友人からの助言」を選んだ生徒は17%しかいなかった。また、「授業の中で行われる話合い活動に積極的にとりくんでいるか」という発問では、52.2%の生徒が「消極的」であ

ると回答しており、美術の授業において話し合い活動を中心とした対話的活動が定着していないことがわかった。しかし、「友人の作品を見て回る鑑賞活動は制作に役立っているか」という発問に対して、68.5%の生徒が「役に立っている」と回答している。以上の点から、美術の授業においては、課題を解決するための話し合い活動だけでなく、相互に作品を見合う中で疑問点を共有したり、助言し合ったりすることで、制作中に自然に対話的活動を取り入れていく必要があると考えた。

(2) 題材観

本題材は材料に高嶺石を使用する。生徒にとって石を彫刻する体験は新鮮なものがあるが、同時になれない材料の特性や初めて触れる道具に難しさを感じる題材でもある。制作において困難に感じた部分を共有させ、互いに助言し合う活動を促すことで、対話的活動の動機につなげていきたい。

(3) 指導観

本題材を学習するにあたり、篆刻や蔵書印などの歴史や文字の成り立ちについて触れ、文字の形やデザインに込められた意味について興味をもたせたい。そして、印影のデザインを構想する段階では、自分の名前について保護者に意味を尋ねさせることで、自分の名前に込められた意味や願いを意識させる。また、自分の考える自分らしさと友人からみた自分を比較させることで、自分自身の個性について改めて考え、デザインに生かせるようにしたい。

構想段階に中間鑑賞会を実施し、デザイン案をもとに友人同士で付箋を使って意見を交換することで、より作品を魅力的にする、あるいは作品の意味を伝えやすくするにはどうしたらいいかを考えさせたい。

4 題材の評価規準

関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
篆刻を制作することに関心を持ち、自分らしい表現を目指し、試行錯誤をしつつ創意工夫している。	自分の名前をもとに発想を広げ、印の特性を考えながら工夫して、デザインの構想を練ることができる。	材料の特徴をとらえ、用具を効果的に生かして、美しく創造的に表現できる。	自他の作品から印の特徴を生かした表現や、用途を考えたデザインの工夫を見いだし、よさや美しさなどを味わったり、肯定的に批評し合ったりできる。

5 指導と評価の計画（7時間扱い）

時間	学習内容・活動	評価規準・【評価方法】
第1次 ①	篆刻について理解し，必要な知識を身につける。	・篆刻に興味をもち，積極的に篆刻について知ろうとしている。関【観察】
第2次 ②	自分の名前から発想を広げ，印面のデザインを構想する。	・自分の名前から発想を広げ，独自性のあるデザインを考えている。 想【観察・ワークシート】
	構想したデザインをもとに中間鑑賞会を行い，互いに助言し合う。	・他者のデザインから良さや工夫を感じ取り，より良い作品になるよう構想を広げている。想【観察・ワークシート】
第3次 ③	下書きを転写し，印刀を活用して丁寧に彫刻する。	・デザインをもとに，用具を効果的に活用して丁寧に彫刻している。 創【観察・作品】
第4次 ①	完成した印面を押印し，鑑賞する。	・他者の作品の良さや工夫を味わい，肯定的に批評し合いながら鑑賞している。 鑑【ワークシート】

6 指導の実際

(1) 導入

授業の導入において，篆刻の歴史や種類について解説した。古河市の篆刻美術館の資料を活用し，身近な地域の作品を鑑賞した。今回の制作は，自分自身の落款印をつくる題材だが，芸術作品の落款だけでなく，花押印や蔵書印なども紹介し，多様な用途の印が作られたことに触れ，自由な発想を促した。

その後，篆刻の由来として篆書体を紹介し，篆書体で自分の名前を書かせることで，その形の面白さに気づかせた。しかし，現代の篆刻は篆書体のみに限らず，金文体等でも制作されることから，作品に必ずしも篆書体を使う必要はないことを伝えた。篆書体に興味をもつ生徒が多く，自分の名前を調べ終わった後も字典を眺めている姿が見られた。

(2) 対話的活動を通じた自分らしさの発見

自分の名前を使った印を制作するにあたり，印を通して「自分らしさ」を表現するよう伝えた。アイデアを考える段階に先立って，自分自身を改めて見つめなおす時間をとった。最初は生徒自身が自分はどのような人間なのかを考え書き出した。その後，学級内を自由に出歩いて，自分をよく知る友人に「自分がどのような人間か」を尋ねさせ，自分の思う自分と他者の思う自分の違いについて考えさせた。

(3) 自分の名前からアイデアスケッチを深める

宿題として，保護者の方に自分の名前に込められた意味や願いについてインタビューさせた。また，授業の中で漢和辞典を引き，名前の漢字がもつ意味を調べさせた。それをデザインの中に生かしていけるようアイデアスケッチを重ねた。

(4) 中間鑑賞会

アイデアスケッチがある程度固まった時点で中間鑑賞会を実施した。現時点での採用案をまとめ、込めた思いや工夫をワークシートに記入させ、構想を整理させた。その後3～4人のグループ内で共有し、付箋を使って意見を交換させた。付箋は2色使用し、よい部分を認め励ます内容と、よりよい作品にするための助言の内容とで使い分けさせた。鑑賞会にあたって、作品の注目すべき点を黒板に例示したり、語彙を増やすために造形要素を示した掲示物を用意したりするなどして、円滑に対話的活動を進められるようにした。また、他の生徒からもらった助言に従う必要はなく、あくまでアイデアのヒントとして使い、意見を取捨選択するよう伝え、気楽に意見交換を行うよう促した。

具体的な助言を伝えることに遠慮がちな生徒が多かったが、互いに作品を見合い、その工夫点などに触れる中で「もっとこうしたい」という思いが高まり、アイデアスケッチに手を加える姿が見られた。



中間鑑賞会の様子

(5) 制作

制作は個人で行い、それぞれが集中して制作に取り組んだ。刃物を使用するので、注意喚起を十分にし、安全に留意して活動させた。制作が進んできた生徒には、教室後方に設置したスペースで押印させ、作品の進行度を確認められるようにした。試し押しのために席を出歩く際には印刀の刃をしまうことを徹底させたことで、ケガなく進行できた。

制作時間の残り3分間を相互鑑賞の時間とし、制作の手をとめて周囲の生徒同士で作品を見合った。その一時間でどれだけ進んだかを互いに確認し、次時の制作に向けて意欲を高めさせた。また、彫刻の手順や道具の使い方についてアドバイスする姿が見られた。

(6) 鑑賞会

印面の制作が終わった後に、改めて鑑賞会を実施した。初期のアイデアスケッチからどう変化したか、制作の上で気を付けた点や工夫などをグループで共有した。その後、学級全体で付箋を使って感想を伝えあった。

中間鑑賞会と同じグループで鑑賞を行ったため、中間鑑賞会の前後のデザインの変化によく気づくことができた。また、自分の助言が作品に取り入れられ、発想に自信をもつことができた生徒もいた。

III 研究の成果と課題

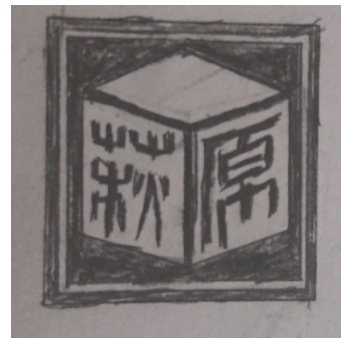
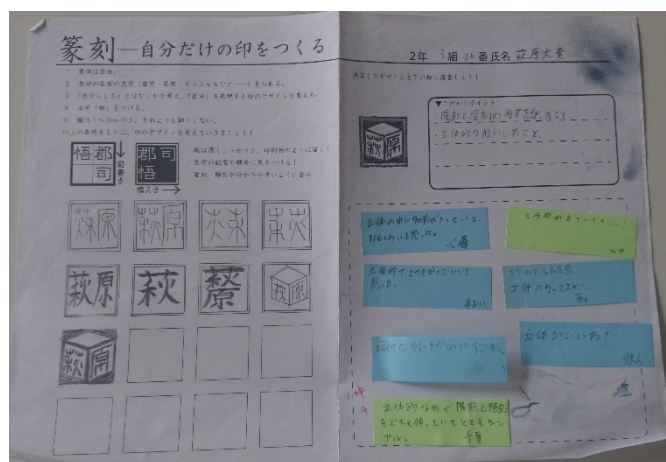
1 成果

中間鑑賞会を通して、印面のデザインにあまり工夫が見られなかった生徒に、デザインをよりよくしようとする努力を促すことができた。枠や文字の太さなど細かな部分に変更を加えた生徒が多く、アイデアの大枠を残したままより魅力的に、あるいは制作しやすいデザインを実現していった。また、デザインに変更を加えなかった生徒も、グループの生徒から付箋をもらったことで、他者との視点や考え方の違いを知ったり、自分の発想に自信をもったりすることができた。

また、授業の終わりに行った3分間の相互鑑賞の時間は、時間を限定したことで、疑問点や気になっている点を効率的に確かめ合うことができた。鑑賞のあとに、次時の目標を振り返りカードにまとめたが、1週間後の授業になるとどんな部分に疑問や気がかりがあったか忘れてしまう生徒もいたため、鑑賞の時間を授業のどの時点で取り入れるかを精査したい。

7月に再度アンケートを実施し、4月のアンケート結果と比較した。構想の段階で参考にするものを問う発問では、「友人からの助言」を選んだ生徒は26.2%に増加し、「参考作品」のポイントを上回った。また、「授業の中で行われる話し合い活動に積極的にとりこんでいるか」という発問では、「消極的」と回答した生徒は40.8%に減少し、話し合い活動に対する苦手意識をわずかながら払拭することができたようだった。

以上の結果から、対話的活動を通して発想をより豊かにする姿勢をもたせることができたように思える。今回の実践では、アイデアスケッチをある程度進めてから対話的活動の時間を取ったため、発想の根幹がぶれることなく、更なる展開につなげることができた。自分自身で考えを深める時間は大切だが、そこで行き詰ってしまった生徒は、他者の発想に触れることで、発想のきっかけを得ることができたようだ。



使用したワークシート

中間鑑賞会前後でのデザインの変化。友人のアドバイスにより、枠をつけて印としてのまとまりを高めた。

2 課題

発想を深めるために互いに助言する中で、自分の発想に自信をもてていない生徒は、友人からのアドバイスを過剰に取り入れてしまったり、自分のアイデアを否定されたような気持ちになってしまったりするような姿が見られた。他者のよい部分を取り入れる柔軟さをもつ一方で、自分の発想に自信をもてるような指導を日頃から心がけ、その上で対話的活動を取り入れていく必要があると感じた。

また、対話的活動の目的が曖昧になってしまったように感じた。「助言をもらえるが、別に参考にしなくてもよい」という姿勢は、気楽に発言できる雰囲気作りにつながったものの、一方で「参考にされないかもしれない」という思いからか、真剣に対話的活動に取り組まない生徒が見られた。自分の発想に自信をもつことと、他者の助言を取り入れることを両立させるよう指導するのは難しく、混乱した生徒もいたようだった。本題材自体、自分を表現するためにアイデアを考えるものであり、他者の視点を重要視するものではなかったため、対話的活動を効果的に生かすことができなかつたように思う。今後は、プロダクトデザインのような、使う人間の立場に立った商品を開発するような題材で対話的活動を取り入れていきたい。

美術の授業において、個々人が集中して黙々と活動する時間は不可欠である。一方で、隣で制作している友人の作品は常に気になるものでもある。相互に鑑賞する時間を定着したことで、制作の時間とメリハリをつけることができたように思う。しかし、時間の長さ、視点や目的の提示、鑑賞を入れるタイミングなど、検討すべき事項が多々あるため、今後の授業の中でさらに実践を重ね、美術における対話的活動の在り方を研究していきたい。

※参考資料

中学校学習指導要領解説美術編（文部科学省）